事例報告２

こども目線に立ち コミュニケーションを創造する

報告者：熊谷 恵利子クリニクラウン

●はじめに

3年間の臨床現場を通して、私たちは様々な年齢や性別、個性をもった子どもたちと関わってきました。その関わりの中で、クリニクラウンとのコミュニケーションによって、子どもたちの変化というものを実践の中で感じています。その事例を報告しながら、「こども目線に立ちコミュニケーションを創造する」ということはどういうことなのか報告したいと思います。

まず、私自身の話になりますがなぜクリニクラウンになろうと思ったのか、そのきっかけが、この活動のおおきなモチベーションなっているので少しお話したいと思います。クリニクラウンになろうと思ったきっかけは父親のことです。父は私が21歳の時にがん（神経細胞にできる肉腫）を発病し、約6年間、入退院を繰り返し3度の手術を経て亡くなりました。入院生活が長くなると、家族にとっても、病院での生活が日常になってきます。だからこそ、深刻な状況であっても冗談を言って大笑いしていました。ある意味、病気だからこそ明るく振る舞っていたと思います。クリニクラウンのことを知った時、父は亡くなっていたのですが、すぐに父のことを思い出しました。父が、院内感染をした時のことです。個室隔離で、面会できるのは家族のみ。数値が悪いものの、体調は安定しているので、ほとんど医師、看護師はきません。そんな状態が長く続いていました。そのときに父親が、「病室をでられないこともわかる、でも誰も来ない部屋で毎日白い壁をみていたら、気がおかしくなりそうだ」と私につぶやきました。つらい闘病生活のなかでも明るく前向きな父だったのでとても驚いた出来事でした。家族だからこそできることがあります。しかし家族だからこそできないことがある。家族だからこそ、負担をかけたくない、心配をかけたくないという思いがあると思いました。そのことを子どもたちに置き換えて考えてみたからです。そして、家族以外の第3者が訪問する意味を感じたからクリニクラウンになりたいと思いました。実際クリニクラウンになった今は、現場にはいる前よりもこの活動の必要性というものを感じています。

例えばこんなことがありました。私が初めてクリニクラウンとして訪問した時に、出会った子どもがいました。その子どもは3歳で、化学療法のため病室から出られず、ベッド上にいました。クリニクラウンと出会い、初めはとまどっていましたが、クリニクラウンとの遊びを通して自己表現できる相手と認識し、徐々に関係性が深まってきました。退院した後で、家族がこんなことを話してくれました。クリニクラウンといるときは、本当に子どもらしい表情をしている。クリニクラウンが訪問する前は、下に子どもが産まれてから、3歳なのに下の子どものために「○○ちゃんのためにお母さん早く帰ってあげてね。」そんなことを言うのですと話してくださりました。意外かもしれませんが、病気になって、家族から心配され、看病してもらっている状態の子どもが、逆に家族に気遣いをよくします。小児医療の現場での子どもとのコミュニケーションについて話すために、入院している子どもたちの特徴をまず説明したいと思います。

●入院している子どもの特徴

入院しているこどもの特徴

- 生活のスケジュールが決まっている
- こどもがこどもとふれあえない （こどもらしい時間をもてない ）
- 慢性的な痛みをかかえている
- スタッフや家族、周りの反応に敏感である
- 無関心
- 家族の心配をしている
- ききわけのいい 大人びている
- 不満やストレスを抱えており発散できずにいる
- かまって欲しい 注目をあびたい
- 不安・孤立感を感じている
- 自己表現する機会が少ない

「生活のスケジュールが決まっている」というのは、食事の時間が決まっていたり、大人のつくったルールの中で生活しているということです。「こどもがこどもとふれあえない（こどもらしい時間をもてない）」これは、小児病棟では感染のことがあり、12歳以下または15歳以下の面会が制限されていて、友

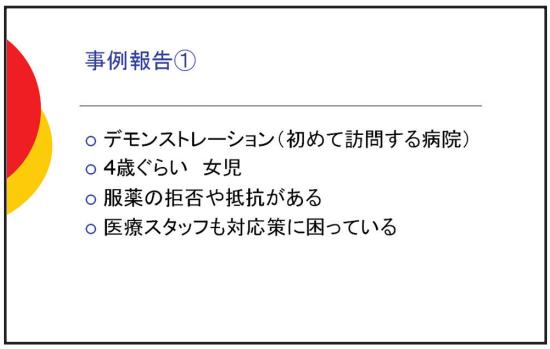
© Japan CliniClowns Association

達や兄弟と会うことができないということです。遊びが、治療が終わった後の褒美になっていたり、遊びの時間が決められています。また行動範囲の制限もあります。自分はこの部屋には入れない、部屋を出るときはマスクをつけないといけないなど子どもなりに理解しています。当たり前かもしれませんが「慢性的な痛みを抱えている」「スタッフや周りの大人の反応に敏感である」逆に「無関心」刺激が少なく、他者に対しての関心や自分に対して関心が少ない。先ほどの事例にもありましたが、「家族のことを心配している」「ききわけがいい、大人びている」「不満やストレスを抱えており発散できずにいる」そのため時には言葉や、態度が攻撃的になる場合もあります。「かまって欲しい、注目をあびたい」わざとベッドから落ちるなど問題行動を起こす子どももいます。「不安感・孤立感を感じている」入院生活の中では「自己表現する機会が少ない」ともいえます。

入院している子どもたちの特徴を踏まえ、日本クリニクラウン協会では子どもの成長に欠かせない3つの要素として、想像力を刺激する「遊び」。自主性を育む「発見」。家族や友だち学校などの「社会的環境」をあげ、これらの3要素の充実を目指しクリニクラウンは病棟を訪問しています。

病棟にもよりますが、一般的に心の病気といわれる自閉症、対人恐怖症、摂食障害、虐待を受けた子どもたちと関わる機会も増えてきました。事前カンファレンスで医療スタッフからこの部屋の子どもは対人恐怖症の子どもで、看護師や医師といった医療スタッフはもちろん、治療を行わない保育士が関わる場合も緊張感が先行し、うまく関われない。訪問時に怖がるかもしれませんと申し送りも増えています。しかし、クリニクラウンが訪問すると、その子どもと楽しくコミュニケーションがとれ、遊ぶことができます。訪問後スタッフから、その状況を見てすごく驚いた、その子どもが家族以外とコミュニケーションをとることができると知ることができて良かった。毎日コミュニケーションがとれずにいると、もう無理かもと思っていましたが、コンタクトが可能だとわかって良かったという意見も多くなっています。こういうことが起こるのは、クリニクラウンは子どもたちの病気の部分ではなく、子どもたちの子どもらしい部分と関わっているからだと思います。そのことを少し事例を通じて、お話したいと思います。

● 事例 1



訪問先の医療スタッフから、クリニクラウンの訪問の様子を見て、その子どもがクリニクラウンに関心を持っている様子だったので、その子の服薬の補助をお願いできないかということで声がかかりました。医療スタッフの話では、子どもが薬をまったく飲まない。何かに混ぜてのまそうとしても敏感に反応して拒否する。また薬を飲まそうということを察知して病室に入りたがらない。プレイルームでほとんどの時間を過ごしていて、プレイルームで眠ってしまうこともあったそうです。医療スタッフは業務の忙しい中、本当に様々な方法を試してみたけどうまくいかなくて手を焼いているということでした。本来クリニクラウンは医療行為は行いません。しかし、現場は大変困っている様子で、またデモンストレーションという1度しか訪問できないかもしれない病棟ということと、子どものことを考えたら、その子はどうなるのか、このまま薬が飲めないと危険なことになってしまうのではと考え、うまくいかないかもしれないですがチャレンジしてみましょうと引き受けました。

その子どもの状況を確認すると、体調もよく、ずっとクリニクラウンの後ろをついてきてくれていたので、その子どもにとって安心できる場所であるプレイルームに行き、遊ぶことにしました。またその子どもだけに注目して不信に思われないように、そこにいる子どもたちと一緒に、楽しい時間を過ごす中で、思い切り身体を動かして遊びました。自然に何か飲みたくなる状況をつくったのです。喉がカラカラで本当にみんなが何か飲みたいそういう気持ちになったところで医療スタッフが飲み物を持ってきてくれました。その子だけ飲ますのではなく、みんなの分です。その子ひとりだったらおかしいですよね。また、みんなで飲もうといって遊びながら、乾杯をしました。その子をみていたら、一瞬ちょっと変な顔をしたけど、そのまま飲んでしまいました。実は、デモンストレーションだったので外には大人がいっぱい観察している状況だったので

© Japan CliniClowns Association

すが、見られているというところに意識がいかないように、また薬を飲ませるということを一旦忘れて、楽しい、おもしろい、遊びたいという気持ちに集中しました。クリニクラウンは、薬を飲まないということに焦点を当てるのではなく、その子どもの気持ち、こころの移り変わりというものに注目しました。佐々木クリニクラウンの報告にもありましたが、医療現場というのは大変厳しい現状があります。この子どもとゆっくり関わりたいと思っていても、そこまで時間をかけることができない現状があります。どこかで、早く飲んで欲しいという医療スタッフの気持ちを察していたのかもしれません。薬がいやだから飲まないというのではなく、ある意味関係性に不安を感じている、人との関係性に不信感を持っているのではないか、そういうところにフォーカスを当てました。子どもに薬を飲んで欲しいからと大人が囲めば囲むほど逆に子どもは受けつけません。

クリニクラウンは、その子どもの瞬間と存在にフォーカスを当て、子どもたちの発信している様々なメッセージを感じとります。その子どもが発信しているすべて、子どもたちの発信している言葉以外のメッセージも感じ取るようにしています。たとえば、目線、身体の動き、表情、姿勢、動作の速さ、声の早さ、高低、強弱、間であったり、体温、呼吸、心拍数であったり、アイコンタクトができるのかなど、子どもが発信しているすべてです。これらのことを瞬間的に観察・感じ取り、どのように読み解くか、解釈したり、想像したり、理解することが重要になっています。

普段大人がこどもと関わると、大人目線というものが基準になります。平均的にこうだから、または自分の経験によって判断しているのです。例えば性別だったり、この年齢の子どもは発達段階がこのぐらいだからとか、データーというものを基に判断している。データーを基に相手を理解するというのも時には大切ですが、果たしてそのことが、本当にその子どもと向き合っているかということを考えると、疑問です。実はみているようでみていない場合があります。「こども目線に立ったコミュニケーションを創造する」ということは、今そこにいる、その子どもの状況や反応に合わせて、関わり方を変えていくことであると考えています。

● 事例２

事例報告②

- 定期訪問先（初対面）
- 個室
- 12歳ぐらい　男児
- 意識障害あり
- 人工呼吸器使用していたが、訪問日に離脱した

部屋全体の緊張感を感じたので、音楽と身体を動かす関わりで、その子どもに直接関わるよりも部屋全体の空気を変えようとしました。その子どもの様子は、開眼していたが、焦点が合っていない状態でした。クリニクラウンの動きに対しても、目で追うということはなく、周りの状況はすこし不安定な様子で、心配そうな母親が見守り、医療スタッフが同行してついてきている状態でした。その中で男児に対して、ハーモニカやシェイカーでコンタクトを試み、その子どもにとってコミュニケーションが取りやすい場所、聞きやすいところを探しました。実は、医療スタッフや家族が関わっている関係性の位置は、案外固定しているのです。家族が面会にきて座る位置とか決まっていたりしますよね。ベッドの横にいることが多いのではないでしょうか？クリニクラウンは、その子どもとコミュニケーションが取りやすい場所を探します。また、音の強弱であったり、リズムを変えてみたりしながら、その子どもと関わりやすい場所や音やリズムを探してみたりします。それは、その子に会えた喜びだったり、楽しさを伝えたいからです。音もコミュニケーションの道具です。どういう音を奏でるのか、リズムはゆっくりがいいのか、早い方がいいのか、または小さな音なのか大きさはどうなのか、様々なことを子どもの状況をみながら、関われるチャンスを探ります。そういうことをしていると、同行していた医療スタッフが「サチュレーション（動脈血酸素飽和度）があがった」「ありえない」「すごい」と言う声がして、盛り上がっていました。不安そうにしていた母親と医療スタッフが喜んでいたのでうれしくなって、シェイカーなどの楽器を渡して一緒に喜びのダンスをしました。すると、だんだんその子どもの表情がやわらぎ、顔色が良くなってきました。ほんの少しの変化ですが顔や身体をちょっと動かし反応していました。また周りがすごく喜んでいるのに応えているように感じました。医療スタッフみんなが笑い、母親もとても喜んでいたことから、明るい空気が広がり、部屋を出

© Japan CliniClowns Association

る際、入室時とは違いとてもいい雰囲気の病室に変わっていました。

クリニクラウンは、その子どもの状況や反応に合わせて、今というものをつかみ感じ取り、関わり方を変え、ありとあらゆるコミュニケーションの方法や手法を用いて、その子どもの反応や好奇心、関心を引き出していきます。例えば、楽しいというときに楽しいと言葉でいうだけでなく、足のステップで楽しさを表現してみたり、歌ったり踊ってみたり、身体全体を使って、今ここで会えた喜びを表現しています。

子どもたちはどんな状況下におかれても、成長し、素晴らしい感性や個性をもつ自分という存在を表現しています。その子どもと関わりを持ちやすいコミュニケーションの手法や、関わる可能性を探りだし、子どもの存在と瞬間にフォーカスを当て関わっています。子どもたちを決して孤独や不安にさせたくない、その子どもと関わり、寄り添い出会えた喜びを伝えます。クリニクラウンのコミュニケーションの利点は、乳幼児であっても、意識レベルが低下した状態の子どもであってもその子どもに合わせたコミュニケーションを創造できること。また、子どもの目線にたちながら、医療スタッフや家族とのコーディネート役、関係をつなぐ役割を担っています。クリニクラウンだからこそできるアプローチであったり刺激によって、子どもたちから発せられる声やからだが語ることば（声なき声）を感じ取り、家族や医療スタッフに伝えていく役目をクリニクラウンは担っていると考えています。

子どもの成長をサポートする専門家であるクリニクラウンは、豊かな表現によって、子どもたちのノンバーバルな部分にも訴えかけ、子どもはより感じ取ることを意識し、子どもが本来持っている子どもの感性や感情をひきだし、自己を表現したくなるきっかけをつくりだしています。会話や遊んでいることがおもしろいのではなく、自分が今、その瞬間に参加している、関わっているということを感じとることは大切なことだと思います。自分の中にわき起こる感情を表現できる相手がクリニクラウンであると考えています。

●質疑応答

子どもがまったく反応しないなど活動の課題や問題点はありますか？

塚原：何を問題にするかということも関わる大人によって変わってきます。私たちクリニクラウンがとる立場としては、大人が考えるルールであるとか、子どもと関わるにはこうした方がいいに違いないという思い込みを排除することが大切です。というのは、子どもたちが思っている「声なき声」を拾ってどれだけ大人達につなげるか、そのバイパスをつくることがクリニクラウンの本来の役割です。医療スタッフや家族の方も、子どもの興味や反応、関心はこういうものだと決めつけている場合があります。それをいかに打破して、子どもたちの声をいかに大人に届けるか、そういう役目が僕たちにあると考えています。医療スタッフとのカンファレンスの中で子どもの様子が伝えられる。そういうことは、僕たちは記憶したり、記載してチェックしたりしますが、あくまでもそういう風にみられているという参考にするだけで実際に関わった時に、子どもの反応や興味が違うということが多い。こういうことに関心があった。こういうことにはこんな風に言葉をかえしてくれたなどを後カンファレンスで伝えています。たとえば先ほどの事例であるように、意識レベルが低下していて、部屋にいっても何もないですよといわれたりするのですね。しかし、実際にはコミュニケーションがスムーズにとれたり、目が開いたり、手が動いたり、足先でリズムをとっていたりするんです。あらゆるところで場の変化というのを伝えようとしていたりするのです。そういう意味では、むしろ問題とされることを問題としてみないで関わること、その辺が関係性改善の糸口になるかなと思っています。やっぱり問題と思った瞬間に、頭で考えてしまいますし、問題と思った瞬間に楽しそうな表情でその子どもと関わることが難しくなります。この問題をなんとか取り除きたいなという雰囲気になってしまいます。しかし、子どもは大人に比べて論理的にものを考えないゆえに、すぐに相手の意図を察知して、殻に閉じこもってしまうということが起こりうるのです。

「存在」と「瞬間」に着目するというコメントがありましたが具体的にどういうことですか？

塚原：大人は関わるときにハウツーを考える。サービスとは何か質の高いものを考えて、そのプログラムを相手に届けて喜んでもらうのがいいと考えがちです。クリニクラウンは、プログラムを一旦排除してその子どもが本当に求めているものはなんだろうということから入ります。それを実現するために、バスタオルを使って遊ぶというトレーニングがあります。例えば、このバスタオルを皆さんに向かって投げます。それを取った形ですぐに何かを表現するというワークがあります。取ったままの形でと言っ

© Japan CliniClowns Association

たにも関わらず、形を変えて表現したりします。もらったモノの形を変えるということは、相手からの要求に100％答えてない例えです。形を変えて自分のやりやすい方に変えるということは、相手のサインに対して100％順応しているということではない。子どもから投げかけがあった場合、結局やりやすい行動をとって大人は自分のしやすいアプローチに変えて関わってしまっているということが多いということです。そこを、クリニクラウンの場合は、相手の投げかけを、とにかく一回引き受けてみることをします。引き受けてみてから、無理なことは無理と判断します。でも赤い鼻をつけているクリニクラウンなら「できない」ということが、かえって絵になるのです。大人は一生懸命やっていて成果が上がらないと分かると、瞬間的に動きが小さくなる。失敗したくないから動きが小さくなってしまう。これは子どもの発想力を刺激するのに悪循環になります。クリニクラウンは、いろいろなチャレンジをすることができる。いろいろなチャレンジをすることによって堅く閉ざされた門戸が開くのです。だから、子どもの心の門戸が開いたら引き時なんです。そこでクリニクラウンがのさばっていたら、本来がんばらないといけない人との道が閉ざされてしまいます。ドアが開いた瞬間に道を譲る、お父さん関わってみてください。先生関わってみてください、お母さんどうぞ、道をゆずるのが、うまいクリニクラウンは優秀だと思います。

© Japan CliniClowns Association